



オーストラリア直送レポート

Vol.7 2015.8.20 感謝と成長～帰国

●ドリップストーン校グループ／教育委員会社会教育課・林
吉備中学校・田中

●パーマストーン校・ローズベリー校グループ／教育委員会社会教育課・松場
金屋中学校・中

ドリップストーン校グループ

(林) 日本への帰国の日を迎えました。ダーウィンには、珍しく早朝は曇空でした。研修生達の心模様を表しているかの様な天気だと感じました。オーストラリアにきてから、研修生達と丸一日会わなかった日は初めてだったので、研修生達がどのような様子で空港に現れるか気になりました。空港に現れた研修生達は、元気そうな姿ではありましたが、どこか寂しそうな雰囲気を漂わせていました。空港に見送りに来て頂いていたホストファミリーと、別れの会話を交わしたり手紙を交換したり、何度もハグしたり写真を撮ったりと研修生一人一人が思い思いの時間を過ごしていました。研修生の中には、感極まって涙を流している研修生も見受けられました。そんな様子を見てみると、こちらまで目頭が熱くなりました。研修生達がオーストラリアでの研修生活を過ごす中で、ホストファミリーの方々の笑顔、優しさ、愛情などに触れ、本当の家族の様な絆を築けた証だと感じました。言葉は勿論のこと、文化、宗教、習慣など全てが日本とは異なる異国の地で家族と言う、最小のコミュニティーで身を持って感じる機会を頂いた全てのホストファミリーに感謝したいと思います。後ろ髪を引かれる思いで空港のゲートを通りました。帰国の途中、シンガポールでの研修を行いました。オーストラリアダーウィンの自然あふれる風景とは異なり、シンガポールの近代的な街並みに研修生達は目を丸くしていました。巨大な近代的ビル群やイギリス統治時代の建物が混在し、現地ガイドの方から丁寧に説明を頂き、研修生達も聞き入っていました。また、夕食で食べたシンガポール



料理の「スチームボート」と呼ばれる鍋料理に研修生達も興味を強く引かれた様子で何枚も写真を撮っていました。オーストラリアノーザンテリトリー準州ダーウイン市（シンガポール含む）での現地研修も無事に完了し、帰国の途に着きました。現地研修を終えて研修生の皆さんに伝えたいことが、2つあります。

1つ目は感謝の気持ちの大切さです。みなさんが研修に参加できたのは、研修生みなさんの熱意や努力があったからだと思います。そのみなさんの熱意や努力を感じて、保護者の方がサポートしてくれたこと。また、現地研修に向けて、学校でのお忙しい業務の中、皆さんに英語指導や現地校で披露するプログラム練習にお付き合い頂いたり、みなさんの相談にのって頂いた、引率教諭 田中先生、中先生。研修生の皆

さんが、現地でスムーズに研修できるように努力頂いた、ドリップストーン、パーマストーン、ローズベリー校の先生方。そして、研修生の皆さんを本当の家族のように迎えて頂いたホストファミリーの方々。研修生の皆さんが、現地研修を行う中で本当に多くの方が関わって、様々なサポートをして下さいました。研修を行っていく中で、研修生の皆さんの口から自然と「thank you」が出てくるようになっていたと思います。日常で誰かが自分のためにしてくれる事を、当たり前と思わずに研修生の皆さんが研修で身につけた「thank you」、「ありがとう」の感謝をあらわす気持ちを、忘れずにこれからも過ごして欲しいと思います。2つ目は、この研修は現地での研修が終わったから終わりではありません。これは、事後研修がまだあるから言っているのでは、ありません。研修生29名の皆さんは、それぞれの思いを抱いてこの研修に参加したと思います。現地研修で、同じ学校、同じ場所、同じホストファミリーと過ごしたとしても、研修生29人が感じたこと



や学んだ事は、十人十色だと思います。研修生と話していると「オーストラリアにいたい」、「日本より良い」といった声を多く耳にしました。それは、研修生の皆さんが自分自身の知っている事や体験した日本での生活とオーストラリアでの現地研修で「生きた体験」をし、比較できるからこそだと思います。皆さんには多様性を受け入れ、その中で自分自身が良いと感じたものを実現できるオピニオンリーダーになって欲しいと思います。皆さんと研修を共に過ごせたことは、私自身にとっても大きな財産です。日に日に成長していく研修生の皆さんを見ていると、オピニオンリーダーに皆さんがなっていってくれる可能性を強く感じます。現地での研修が終わったから終わりではありませんと言ったのは、研修で得た体験や思い出をもとに今後も研修生での姿勢を忘れずに過ごして欲しいからです。皆さんの今後の人生において、辛い事や難しい問題に直面するときがきつくとくると思います。でも皆さんは、中学生という多感な時期に、言葉、文化、習慣などが違う異国の地で、親御さんのもとを離れて過ごした、かけがえのない体験をもっ

ています。その事を思い出し、自分を信じて行動すれば皆さんならきっと乗り越えられると思います。

(田中) 研修の日程を終えました。みんな日焼けをして、少しふっくらした気がします。見た目だけでなく。一人一人が自分なりに何か得られた目をして空港に集合しました。

振り返ると、事前研修で、提出書類の忘れ物が多かったり、作業が遅れたりなど、教育委員会の方々にご迷惑をおかけするばかりでした。現地の研修でも、オーストラリアの生徒さんたちのように積極的に動けなかったり、反応を示せなかったり、残念な気がしていました。でも、現地で、1



日の終わりに頑張ったことを話してくれたり、朝登校してホストファミリーと楽しく過ごした内容を報告してくれたりするなど、日に日に表情が明るくなり、多くのオーストラリアの子たちと話す場面が、増えていきました。授業では、緊張のため硬くなっていたと思います。それは、「頑張りたい」という気持ちの表れだったのだと思います。そんな時、手を挙げて質問ができたり、説明を聞いて理解できた子が、他の子を助けてあげられたり、お互いにカバーし合っていて良かったです。また、現地の子が、ゆっくり、優しく説明し助けてくれる温かい場面もありました。笑顔で“Thank you.”と言え取り組もうとできただけで、十分な成果だったと思います。

最後まで名札を忘れる、その日のまとめを忘れる、促されても質問ができなかったなど、失敗もいろいろありました。それでも、彼らはいっしょうけんめいであったのだと思います。私も早くに感じ取れていたら、もっと支援ができただろうと反省します。

現地の生徒さんたちが、先生の指示に素早く動けたり、困った子に歩み寄って優しくったり、必要な場面で質問ができるなど、自分たちは、すぐに真似できなかつたけれど、意識には留めることができたのではないかと思います。言葉も文化も違う生徒たちが、安全に学べ、楽しめるために、見えないところで、両国の多くの方々が、たくさんの働きをしてくださっていることにも、感謝しなければなりません。そこを事後研修でも、生徒と一緒に振り返っていきたいと思います。ドリップストーンミドルスクールの教育の中に“Respect”「尊敬する」と書かれていました。生徒との生活の中で、そのことを意識できるよう、私自身も努めていきたいです。

パーマストーン校・ローズベリー校グループ

(松場) 8月20日 オーストラリア滞在最終日、午後1時ごろダーウィン国際空港に到着すると、ホストファミリーに送ってきてもらった研修生達が到着していました。涙を流してホストファミリーとの別れを惜んでいる研修生や、日本に帰れる安心感からいつもよりテンションが高い研修生、私に対して昨日の休日の過ごし方などを熱心に話してくれる研修生など、様々な表情を見せつつ出発時間が近づきます。



1週間前にこの場所に到着し、ホストファミリーと初対面した時の緊張した表情とは違い、リラックスした表情と、オーストラリアで1週間を無事過ごせた自信に満ちた満足そうな表情を多く感じたのが印象的でした。そんな表情を見ていると、PS校の河合先生をはじめ、PS/RB校のたくさんの先生方や生徒達、そしてホストファミリーが研修生達をあたたかく迎え入れてくれたお蔭だと感じることができました。最後にPSチームを代表して団長から、お見送りに来ていただいたPS校教頭先生に対して、英語でお礼を伝えました。研修生ひとりずつ、教頭先生との固い握手を交わして搭乗口に向かい、午後3時45分ごろダーウィンを出発しました。機内では、眠ったり、友だちと談笑したり、熱心にレポートを仕上げようとする研修生が居ました。印象的だったのが機内食のメニューをCAから聞かれる場面です。さすがオーストラリアで1週間英語を使った生活をしてきただけあって、片言の英語ではありますが自信をもってコミュニケーションを取

っているかのように感じました。帰路もシンガポールを経由して日本に帰りました。シンガポールでは夕食を含めた市内観光をしました。ドリップストーン校の生徒も混ざったため人数が増え賑やかさが増えます。シンガポール料理の鍋を囲んでおいしくいただくことができました。その後の市内観光では、有名なマーライオンや、近代的な建造物、中華街を徒歩やバスで見ることができました。マーライオンの前で撮影した集合写真は、きっとよい思い出の一枚になると感じました。記念撮影をひと通り景色をカメラで撮影した研修生のほとんどが、すぐにみやげ物店に向かいます。その後、シンガポール・チャンギ国際空港に向かいました。研修生の表情からは疲れと眠気がピークに達していると感じられました。先生方を含めた引率職員一同で無事に日本に向けて出国できるようにサポートをしました。結果、無事出国手続きを終え搭乗しAM1:30ごろ帰国の途に就きました。飛行機に乗った研修生の殆どがすぐに眠りにつく様子からは、子どもらしさを感じる事ができました。翌朝、研修生全員が関西国際空港につき帰国することとなりました。研修生からは『日本の方が暑い!』などの声が聞こえてきました。オーストラリアとの気候の違いを自分の肌で感じられた瞬間であったと思います。吉備庁舎までの赤バスの車内は、眠っている子もおりましたが、談笑したり歌を歌ったりと、和やかな雰囲気と共に、オーストラリア研修団としての一体感を感じる事ができました。私も3人の子どもがおり、長女が4年前にオーストラリア研修に参加させて頂きました。その時は保護者として、遠くはなれたオーストラリアで過ごすわが子の事を案じたのを昨日の事のように覚えています。今回、引率者として同行するという貴重な機会を頂きましたが、滞在日数が増えるにつれ積極さが増す研修生たちの順応性の高さには正直驚かされました。研修生それぞれに

個性があり、現地の生徒との交流に何らかの切っ掛けを必要とする研修生も多くいたように感じます。そういった場面では、今回引率同行頂いた田中先生と中先生の語学力や積極的な行動を通して交流の切っ掛けづくりに努めて頂けたことに感謝したいと思います。思い返せば6/5から事前研修が始まりました。『事前研修は必ず参加する』『各自課題を見つけ事前学習で習得した知識を現地で体験し、学習した成果との差異を学ぶ』『日常会話ができるよう努力する』を目的として8回行われた事前研修でありましたが、オーストラリアでの現地研修を終えた研修生達の事後研修ならびに事後発表会が今から大変楽しみです。クラブ活動や宿題など忙しい夏休みだと思いますが、研修レポートなどの作成作業をよろしくお願いします。



(中) あっという間の10日間、ダーウィンでの学校、友だちそして家族を惜しむ声を聞くところの数日間で、たくさんの素晴らしい経験と思い出が出来たのだらうと思います。初日を振り返れば、違う文化や英語での交流になかなか自分自身から動けない様子が見られました。誰でも最初は新しい事にチャレンジする事への不安があり、最初の一步を踏み出すことは難しいことと思います。しかし、研修生の皆さんはこの短い期間の中で伝えたいことを一生懸命、ジェスチャーや知っている単語を駆使し伝えようとしたり、異文化を理解し、また時には日本の文化を伝えたりと何ごとにも積極的に交流が出来ました。これらの経験が研修後、皆さんにとって大きな変化を与えるのか、もしくは小さな変化なのかそれは個人によって違うと思いますが、間違いないのは何かしらの変化をこの研修から得たということだと思います。グローバル化社会と言われる中で、今回の研修生たちがしっかりと海外に目をむけてこれからのリーダーとなってくれることを期待しています。最後に今回の研修に参加させていただき、また最も近くで研修生の皆さんの成長を見させていただきありがとうございました。

